

## 炭坑節（福岡県）

この「炭坑節」は、筑豊炭田の田川地方に生まれた選炭唄である。

炭坑唄を労働形態で分類すると採炭唄・石刀唄・南蛮唄・選炭唄の四種がある。採炭は炭坑仕事の主なもので、かすかな灯火に照らされた薄暗い炭壁に向って独りつぶやくように歌ったのが採炭唄である。石刀唄は江戸時代以降各地の金山で鉱脈を掘り崩してゆく時の唄であるが、炭坑では火薬を詰める穴を掘るときに歌われた。南蛮唄は山口県の宇部が本場で南蛮車をまわすときに歌うものである。選炭唄は一般鉱山で選鉱するときに歌う「からめ節」と同じ性格で、「からめる」とは「選鉱する」ことであり、「からめ節」を「選鉱節」ともいう。選炭は石炭の商品価値を高めるための作業で、どこの炭坑でも行われていた。金網に枠をとりつけた万石と称するものを斜めに立てかけ、これに石炭を流してふるい分けていた。この仕事にあたるのは主として年頃の娘であるが、一日中灰塵にまみれるので、肌を守るために化粧を怠らなかつた程で、のん気に歌うどころではなかつた。ところが明治 40 年代以降、石炭の販売競争が激化するにつれて機械選炭法に発展しベルトの上を流れてくる石炭を手選にする仕事のリズムミカルであり集団的なので、大勢でいわゆる労働歌として歌われるようになった。


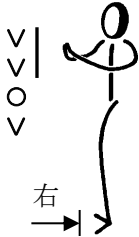
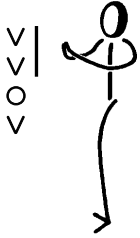

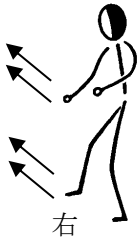


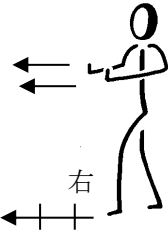


田川の郷土史研究家で音楽家でもある故小野芳香氏によれば、選炭婦の作業唄として生まれたこの「炭坑節」は、時代の変遷とともに曲・節とも自然発生的に変化し、新しい歌詞が次々と作られ、大正 4 年頃から宴席でも歌われるようになったという。小野氏が三味線曲に編曲してからは一般に歌われるようになり、昭和 7 年、後藤寺町(現在の田川市奈良)検番芸姑の歌二・清代治が歌い又兵衛の三味線でレコード化した時に「炭坑節」という曲名にした。全国的に有名になったのは第二次大戦後新たにレコード化してからである。

たまたま、大牟田三池炭坑の管理課に勤務する進駐軍の兵隊が日本のフォークダンスとして炭坑節に興味を示した。当時民踊研究家の故中山義夫氏が手を加え、ダブル・サークルで踊って最後の動作で二人が向き合って互いの両手を合わせ、最初の“チョチョンがチョン”のときに再び進行方向をむいて踊る踊り方を紹介した。今ではそのような踊り方をする人はいないが、古老の記憶に今も残っている。ともあれ外国でも盛んに踊られる日本のフォークダンスになっていることは特筆すべきことである。これは炭坑節の歌詞が炭坑の作業唄として独創的な味わいを持ち、また、近代的な感覚に通ずるリズムを持っていることを証明するものである。

# 炭坑節

- ◆ 隊 形：輪おどり。
  - ◆ 進行方向：反時計まわり。
  - ◆ 踊り始め：進行方向をむき、前奏4呼間を聞いて踊り始める。
  - ◆ 踊り方
- ① チョチョンがチョン  
胸前で“チョチョンがチョン”と手拍子を行う。図(1)
  - ② 一つの二つ  
右足を右斜め前に蹴り出し、両手を軽く握って右斜め下に伸ばす動作(シャベルで掘る動作)を2回行う。図(2)
  - ③ 三つの四つ  
手と足をかえて②の動作を反対方向に行う。図(3)
  - ④ 五つの  
右足前進、両手は握って右肩にかつぐ。図(4)
  - ⑤ 六つ  
左足前進、両手は握って左肩にかつぐ。図(5)
  - ⑥ 七つの八つ  
左足から眺めかざしで2歩後退する。図(6)(7)
  - ⑦ 九つ・十  
両手首を立て、トロッコを押すように2回前を出し、右足から2歩前進する。図(8)
  - ⑧ 十一  
右足を出して両手山開きを行う(ボタ山の形を表わす)。図(9)

以上をくり返す。

<p>◆輪おどり ◆反時計まわり ◆進行方向をむき、 前奏4呼間聞いて 踊り始める。</p>	<p>(5)  六つ 左</p>	<p>(10)  右</p>	
<p>(1) </p>	<p>(6)  七つの 左</p>	<p>以上を図(2)からくり返す</p>	
<p>(2)  一つの二つ 右</p>	<p>(7)  八つ 右</p>		
<p>(3)  三つの四つ 左</p>	<p>(8)  九つ・十 右</p>		
<p>(4)  五つの 右</p>	<p>(9)  十一 ボタ山に開く 右</p>		